



Title	アリストテレスの自然目的論：端的必然性と条件的必然性の両立可能性
Author(s)	井村, 直道; IMURA, Naomichi
Citation	哲学, 56, 113-136
Issue Date	2024-12-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95650
Type	departmental bulletin paper
File Information	56_t8.pdf



アリストテレスの自然目的論

— 端的必然性と条件的必然性の両立可能性 —

井 村 直 道

はじめに アリストテレスの目的論的自然観を巡って

本稿はアリストテレス哲学の一つの要諦とも言える、彼の自然目的論を取り扱う。アリストテレスの自然観は「自然は何一つ無駄なことをしない」(e.g.『天体論』271a23;『魂論』432b21;『動物部分論』658a9;『動物発生論』741b5) という標語から端的に読み取れるように、自然のうちに合目的性を見出し、いわゆる目的因の存在を見出すものであった。アリストテレスの目的因を巡っては、その一般的な特徴づけや適用される事象領域、その他の四原因との関わりが問題となるが、本稿では、彼の自然目的論を理解するにあたりとりわけ重要な概念である端的必然性と条件的必然性の両立可能性に焦点を当てる。アリストテレスは数ある自然事象のうちでも、「人間は人間を生む」という有機体の自己複製機構を「最も自然的なこと」(『魂論』415a26) とみなし、有機体が成体になるまでの無駄のない生成過程を目的因の支配に訴えて説明しようと試みる¹。そこで問題となるのは、目的因が質料を支配する際に見出される目的論的必然性(条件的必然性)が、始動因と質料因がもたらす質料的必然性(端的必然性)とどのように共存し、両立するのかということである。アリストテレスはこうした問題意識の下、『自然学』第2巻9章で、端的必然

¹ これと異なる見解として例えば、Lang 2007は、四元素の本性的な運動が目的であると語り、Sedley 1991は地球という一つの惑星自体に大きな秩序を見て取ることができる語る。

性と条件的必然性の両立可能性を問うている。

本稿では、この問題を取り扱うことによって、目的因の役割を巡る問題に回答を与えたい。この問題については以下 (A) と (B) の二つの立場が存在する。

(A) 強い還元不能主義 (Gottthelf)

目的論的な説明が必要であるのは、有機体とそのパーツの生成が、それらを構成する四元素の持つ質料的な力能によって成し遂げられないからである。代わって、四元素の力能に還元されることのない形相の力能 (potential for form) が存在し、その質料に還元不能な力能に訴えて有機体の生成を説明する際に目的論的説明が必要となる²。

(B) 限定的な還元不能主義 (Charles)

目的論的説明が必要であるのは、有機体の生成を質料的必然によって説明できないからではない。実際に、生物の生成過程は、目的因に言及することなく、純粋に質料的な記述によって説明することができる。目的論的説明が必要となるのは、有機体全体とその部分が、有機体自身の生存に対して持つ適切性や善性や秩序を説明するためである。なぜなら、こうした善性や秩序は、質料に還元できず、質料的な必然性は、たとえ有機体の生成過程を必然たらしめることはできても、それらの過程に見出される、生存というゴールに対して持つ善性を説明することができないからだ³。

目的因が主に何を説明するのか、(A) は質料に還元できない形相を実現する力能を、(B) は目的的事象の善性であると主張する。いずれの解釈が正し

² cf. Gottthelf 2012, p. 30, p. 71. なおこの還元不能性解釈を支えるものは、アリストテレスが置かれていた当時の化学の貧弱さである、とGottthelfは述べている (*ibid.*, p. 18, 28)。この解釈に賛同するものにはCharlton 1985; Waterlow 1982; Cooper 1987; Lennox 2001などがあり、標準的な解釈となっている。

³ Charles 1988.cf. Sorabji 1980, pp.171-4.

いかを決定するためには、アリストテレスの生物学的著作に言及する必要があるが、本稿では紙幅の関係上、必然性という観点に限定して(B) 解釈の立場を擁護することを目的としたい。もしも、この立場が正しいとすれば、アリストテレスは以下に紹介する端的な必然性だけによる生物の発生を主張することで、有機体の生成過程の完全に質料的な記述を認めていたはずである。そして同時に、条件的必然性による質料生成の支配を認め、以下で解説する両必然性による強い両立可能性を問題にしているはずだ。本稿は、この可能性を探ることと、併せて(B) 解釈の正しさを論じる⁴。

1 端的必然性と条件的必然性

テキストの具体的な箇所を検討する前に、本節では、アリストテレスの言う端的必然性と条件的必然性について説明したい。

まずアリストテレスにとり必然とは、「他の仕方ではありえないもの」(*τὸ μὴ ἐνδεχόμενον ἄλλως εἶχειν*)⁵として、一般的には或る事象間の単一的なあり方を意味する。そして目下の文脈で問題となる必然性は、端的な必然性(Simple Necessity (以下SN) / *τὸ ἀπλῶς ἀναγκαῖον*) と条件的な必然性(Hypothetical Necessity (以下HN) / *τὸ ἐξ ὑποθέσεως ἀναγκαῖον*) の二つである⁶。

SNとは、目下の文脈で問題となる月下世界の領域では、物理的必然性(あ

⁴ 強い両立可能性が成立するかどうかを問題にすることは、結局のところ、条件的必然性(=HN)が事物の生成の効力を持つのか、それとも説明力を持つのかを問題にすることに等しい。三浦 2008,47頁は、この問題に関する近年の論争史を簡潔にまとめている。

⁵ 『形而上学』1015a34.アリストテレスは当該箇所、この意味の必然性に基づき、その他の必然性の意味も理解されると説いている(cf. 1015b10)。

⁶ しかしFrede 1985,p. 208が述べるように、この必然性の概念は論理学から自然学の領域に至るまで、非常に多くの異なる場面に適用されていることには注意が必要である。

⁷ 天界という領域を含めれば、SNは天体などの永遠的な存在者の運動に第一に帰せられる(『生成消滅論』第2巻11章、『動物発生論』(639b23))。また論理の推論過程にも見出される。それ故に厳密には、SNは物理的な必然性と同じではないだろう。しかし、月下世界の領域に限った場合に、事物の本性的な運動にSNが見出されるという以上、SNを物理的必然性として理解することは妥当であろう。

るいはCooperの語るデモクリトスの必然性)に等しい⁷。例えば、月下世界における地水火風による四元素の運動は、自らの「衝動」(ὁρμή)と呼ばれる質料的な自然本性に基づいて(κατὰ φύσιν)単一の仕方で行われるので、その運動は端的な必然性に区分される(cf.『分析論後書』94b37f)。それ故に、SNは合成体の質料部分とその運動に帰属すると考えられるので(『自然学』200a30f)、ゴールに至るまでの運動は下図のように示せる。

$$[SN] \ M_1, M_2 \cdots M_{n-1}, M_n (=G) \quad [M=\text{質料}, F=\text{形相}, G=\text{ゴール}]$$

他方でHNの場合、当該の必然性はある一定の条件下でのみ見出される。目下の生成論の文脈では目的因が専らその条件としての機能を担う。例えば、家が存在する場合、家の制作に必要な素材と、家の順序だった制作過程は、遮蔽という目的因としての家の機能を基準に、制作過程のスタート地点に向かって遡及的に決定され、必然化される。さらに、目的因としての機能は合成体が形相を伴った状態で獲得されるので、下図のようになる。

$$[HN] \ F (=G) \Rightarrow M_n, M_{n-1} \cdots M_2, M_1 \quad [\Rightarrow \text{は支配を示す}]$$

問題はこの二つの必然性がいかに両立するかということだ。結論から言うと、本稿は以下のような図式の下で両立可能性を考える。

$$[SN+HN] \ M_n (=G (M/F)) \Rightarrow M_1, M_2 \cdots M_{n-1}, M_n (=G)$$

上図は、生成過程を質料的に記述するという方法論の下で、まず矢印の右側半分でSNによる事物の生成を描くことに成功している。そして、左側では、形相である目的因の存在を記し、さらに矢印により目的因による質料の支配を描くことにも成功している。もっとも、質料的な次元で事物の生成を考える場合には、右半分しか観察することはできず、目的因の支配を記すことはできな

いだろう。しかし、そうした制約を除けば、われわれは目的因による生成の支配を図のように描けるはずである。この図式が示すものは、一つはわれわれが支持したい(B) 解釈の主張である有機体の生成過程の自然的な記述可能性(SNの存在)であり、もう一つはその自然的な記述に決して反映されることのない非質料的な目的因の質料に対する支配(HNの存在)である。本稿はこのようにして、二つの必然性が両立可能であり、(B) 解釈が妥当であると考え⁸。以下では具体的なテキストを参照しつつ、さらにこの解釈の妥当性を検証していきたい。

2 『自然学』B9の主題とは何か

(B) 解釈が正しいことを示すために、まずは『自然学』第2巻9章(以下B9)の主題がそもそも何であるのかを確認しよう。本稿は冒頭にて、B9の主題が二つの必然性の両立可能性であると述べたがこれは決して自明なことではない。B9の主題に関しては以下に紹介する二つの解釈を巡って論争が存在する。

争点となるのは、B9冒頭の次の一節にある。

「必然から」は、果たして条件的にあるのか、それとも「条件的に加えて
端的にもあるのか」(τὸ δ' ἐξ ἀνάγκης ἐξ ὑποθέσεως ὑπάρχει ἢ καὶ ἀπλῶς;) (199b34f)。【下線と □ は引用者による】

引用部分はB9の主題を提示している。しかし、この主題の解釈を巡ってこれまで二つの読みがなされてきた。その鍵となるのが、引用文中にあるκαὶ(～もまた)の存在である。伝統的な解釈者たちは、このκαὶを訳出しないことで、

⁸ Charles 1988はこの[SN+HN]の図式に示される必然性を前向きの(forward looking) HNと呼び、これが生成過程の十分条件を特徴づけると考えた。そして、 $F \Rightarrow M_n, M_{n-1} \dots M_2, M_1$ を後ろ向き(backward)のHNと呼び、この必然性が生成過程の持つ善性を説明する機能を有すると考えた。だがたとえ目的因が生成過程を支配したとしても、それは生成過程を純粋に質料的次元で記述できることと「完全に独立した」問題であると主張している (*ibid.*, p. 45)。

アリストテレスが「HNかそれともSNか」という二者択一を問題にしていると解し、彼が必然性の両立可能性を端から問題にしていないと考える (Simplicius, Philoponos, Thomas, Ross)。つまりこの解釈によれば、アリストテレスはSNとHNを排反的選言として捉えていることになる。他方、現代の研究者たちは、*kai*を「～もまた」と訳出し、問題の二者択一を「HNかそれともHN+SNか」と解釈する (Charlton, Waterfield, Charles)。この後者の読みに従えば、アリストテレスは「HN+SNか」の選言肢を候補として挙げることで、二つの必然性が両立する可能性を問題提起していることになる⁹。

このB9の主題に正しく応答するためには、B9の一つ前に位置するB8の冒頭部分に注目する必要がある。アリストテレスはそこで各章の課題をこう述べている。

まず [B8で]、自然が根拠のうち、「何かのために」としての根拠に属することを語らなければならない。次に [B9で] 必然的なものについて、それが自然においていかにあるかを語らなければならない (198b10-12)。

⁹ Cooper 1987もまたこの立場に与すると言うことができる。しかし、彼の見解は同じ立場の者たちとは異なり特殊である。彼は 'τὸ δ' ἐξ ἀνάγκης' という表記が、B8でも用いられていることを重視し、これをSN (彼の言うデモクリトスの必然性) であると解釈する。そして、問題の選言肢を、「HN+SNか、それともSNか」と解釈し (ibid., p. 262)、さらに、*kai*を 'in fact' と訳することにより、アリストテレスは後者の立場 (SN) を論敵の立場として強調していると説く (ibid., p. 265, n. 14.)。彼のこうした解釈は、結果的にSNとHNの両立可能性を問題にしていることになるが、その結果に至る前提は誤っている。本文でも述べるが、文脈上B9はB8の目的因の存在証明に続く位置にあり、HNの存在を探る試みがなされる箇所だ。B9の主題をこのように解すれば、両方の選言肢にHNを含めて読む解釈のほうがより自然であり、SNだけを問題にすることになるCooperの読みは不合理である。アリストテレスはB9であくまで目的因の存在を自明としているために、両方の選言肢にHNを含めて語っているのである。また千葉の述べるように、ここでの 'τὸ δ' ἐξ ἀνάγκης' という表現は、あくまである二つの事態の間に見られる必然的な関係を表現するための一般的なものであり、SNだけを表現しているものではないと解するべきである (千葉 2002, 328-9頁)。

アリストテレスの議論の方向性としては、まずB8で自然事象が目的論的事象であることを確認し、B9でその目的的な自然事象の内に見出される必然性の在り方を問題にしようとしていることがわかる。B8でアリストテレスは降水や歯の生成が無目的ではないかとする反対意見の紹介に際し、端的必然性を以て彼らの説明を特徴づけている。この反対意見を駁する仕方自然の目的性を主張しているのであるから、目的的事象が端的必然性に属さず、別の必然性に属することは読者に取りこの時点で明らかであった。にもかかわらず、B9で再び目的的自然事象が「HNかSNか」の二者択一が問題になったとすれば、B8の議論を再び蒸し返したこととなろう。それよりはむしろ、アリストテレスがB9で議論をさらに一歩進め、彼自身の主張するHNと、論敵が主張しているSNとの調和を問題にしたと考える方が、文脈上からも議論の生産性からものはるかに魅力的である（cf.『動物発生論』639b24）。以上の見解は、4節以降で確認するB9の議論から鑑みても妥当だと判断できるはずである。

3 二つの必然性の両立可能性に関する諸解釈

B9における主題が、SNとHNの両立可能性であることは確認されたこととしよう。では、アリストテレスはこれら二つの必然性が実際に両立可能であると考えていたのであろうか。もし可能であると彼が考えていたなら、それはどのようにしてか。これを次の問題としたい。この問題を解くために、われわれは両立可能性に関する三つの解釈を候補として検討しなければならない¹⁰。

(a) 両立不可能性

SNとHNは両立不可能な必然性である。自然物の生成において機能している

¹⁰ cf. Bradie & Miller 1984.

¹¹ Balme 1972, p. 79は、『動物部分論』などの生物学著作を典拠に、SNが結局はHNによって支配されているにすぎないとして、二つの必然性が両立不可能であると説く。しかし、Balme 1987において、四元素の運動はSNによって支配されることを彼は認めている。

必然性は実質HNだけである。(Balme¹¹)

(b) 弱い両立可能性

SNとHNは両立可能である。しかし、目的因への言及無くしてSNだけでは生成物のゴールを実現することはできない。つまり、SNは、ゴールを実現するための十分条件を特徴づけることはできず、代わりにHNがゴールの実現に必要なものである。(Gotthelph, Cooper¹², Lennox)

(c) 強い両立可能性

SNとHNは両立可能である。目的因に言及することなく、SNだけによって生成物のゴールを実現するための十分条件を特徴づけることが可能である。HNはあくまで、生成過程の善さや無駄のなさを説明する。(本稿の立場¹³)

(B) 解釈の妥当性を示すために、われわれは (c) の立場を支持し、(a) と (b) の立場を退ける必要がある。そのために、われわれはまずSNが、生成物のゴールを実現するのに十分であることを示す必要がある (4 節)。そして、HNが、SNとは別様に、しかも競合しない仕方で、生成過程を必然化することを併せて述べなければならない (5 節)。

4 SNのみによる生成の可能性

B9において、アリストテレスは目的論的必然性の存在に訴えて、エンペドクレスら唯物論者を批判している。しかし、彼は論敵の立場を全面的に否定しているわけではなく、一部容認しているように見える。本稿はその一部分が、SNが生成の十分条件であることを示すための鍵となると考える。本節では、

¹² Cooper 1987の立場は厳密に言うとはGotthelfと異なる。彼は、HNはゴールを実現するために必要な質料の存在だけを必然化するもので、質料の運動は、あくまでSNによって必然化され则认为た。

¹³ Charles 1988の立場でもあるが、厳密には相違もある。詳しくは注8を参照のこと。

これを確認する作業の出発点として、B9におけるアリストテレスの論敵である唯物論者の立場を描写するところから始めよう。

唯物論者はSNだけが事物の生成を必然化すると考える。それ故に、彼らはその一例として家屋の壁の生成を次のように説明する。

〔後に語る推論上の次元における「必然から」ではなく〕現に (vūv) 生成における「必然から」は、あたかも、ある人が、家の壁が必然から生じられているようなものとして考えられている。というのも、重いものは、自然本性上、下方に運ばれ、軽いものは自然本性上、上方に運ばれる。それ故に、かたや石や土台は下方に、他方土はより軽いためその上に、頂には木が置かれる。というのも、木は最も軽いからである (199b35-200a5)。

唯物論者に言わせれば、家屋の壁は、壁を構成する素材の自然本性によって必然的に生じる。例えば、石や土台などの素材は、その素材が有する重量に応じて、上下に運動し、その結果として必然的に各素材の配列が決定する。アリストテレスは、こうした唯物論者の見解を紹介した直後に、彼らに反して、家屋の壁が目的的に生成することを主張する。

しかし、①これら〔石や土台や木〕ぬきに、壁は生じなかったが、②質料故にという仕方を除いて、③これらの故に生じたのではなく (οὐ μέντοι διὰ ταῦτα πλὴν ὡς δι' ὕλην)、④或るものを覆ったり、保護するために、壁は生じたのである (200a5-7)。(下線は引用者による)

目的的な生成を説くアリストテレスの上の主張は決して単純ではない。アリストテレスは確かに一方で、壁の機能に注目し、壁は、石や土台や木などによって生成したのではなく (③)、あくまで遮蔽などの目的のために生成したのだと主張している (④)。この点において、彼は目的因の存在を主張しない唯物

論者の立場を確かに批判している。だが同時に他方で、下線部の①と②の主張により、ある条件を加えている。それは、「質料故に」壁が生じるということである。というのも、まず①において、アリストテレスは壁が目的的に生成するにしても、質料の存在が必要であることを確認している。そしてさらに②で副詞 $\pi\lambda\eta\nu$ (except)を加えることで、「質料故に」壁が生成することを、③「木や石の故に生じたのではない」の例外として、認めている。したがって、これら①－④からなる彼の主張に従えば、壁は目的因に従いながら、同時に質料の故に生じることになるのである。

この主張が何を意味するかを正しく評価するために、われわれはここで「質料故に」が一体何を意味するかを明らかにする必要があるだろう。考えられうる解釈は二つである。一つ (i) は、この句が単に質料因とか素材を意味するものとする解釈¹⁴。もう一つ (ii) は、質料とその運動を意味するものと考え、上で見た唯物論者が唱えていたようにこれを始動因的に理解する解釈である。前者の質料因的な解釈 (i) に従えば、木や土台や石は、肉や骨が人間の質料因と言われるのと同じ仕方で、壁の構成要素としての質料因であることになる。つまり、「質料故に」壁が生じるとは、壁が石や木などの材料によって造られるということを単に意味するものであって、唯物論者のように、壁が石や木などの素材の本性的な運動により生じることを意味するものではない。それ故に、アリストテレスは②で「質料故にという仕方を除いて」と述べて、石や木が質料因として機能することに留意していることを一方で示し、他方③で「壁はこれら木や石の故に生じたのではない」として、石や木の本性的な運動によって、壁が生成することを結果的に否定するのである。

しかしだとすれば、アリストテレスは事物の生成を説明するにあたり、素材を単に質料因としてのみ捉え、自然本性に従って運動するという素材の始動因的な性格を全く考慮に入れていないことになる。そして、生成のゴールに至るまでの素材の運動は、それ自身の自然本性に則ったものではなく、完全にHN

¹⁴ Frede 1985, p. 210; Charlton 1992, pp. 42-3; Charles 1988, p. 10; 三浦 2008, 39頁。

によって支配されるものとなる。それ故、この考え方に従えば、アリストテレスは、目的論的な自然事象におけるSNの役割を完全に無視することになる。しかしこれでは、1節の考察に反して、アリストテレスは二つの必然性の両立可能性を冒頭で問題にしていながら、すぐさまその可能性を否定し、Balmeの主張する(a)両立不可能性解釈を採用していることになる。だがわれわれは、アリストテレスが両立可能性の問題を提起してから、この結論を導くまでの議論をB9のどこにも見出すことはできない。

そこでわれわれは、アリストテレスがSNによる生成を否定していないと読むための、もう一つの解釈(ii)に目を向ける必要がある。それは、「質料故に」を強く読んで、素材としての質料だけではなく、質料の本性的な一連の運動までも含めるという解釈である。このように「質料故に」を「質料とその運動の故に」と読むことによって、アリストテレスはSNによる壁の生成可能性を認めていると考えることができる。

しかしここで一つの問題が生じる。それは、この読みを採用した場合に、「壁は、質料故にという仕方を除いて、これら木や石の故に生じない」(③+④)の部分の評価できなくなるということだ。一方、質料因的な解釈に従えば、「質料故に」は単なる素材を指し、素材としての木、石の原因性を認めるが、素材が引き起こす本性的な運動の故に壁が生成したのではないと読むことができる。他方、始動因的な解釈では、質料の運動を「質料故に」に含めることで、こうした読みができなくなり、副詞 $\pi\lambda\acute{\alpha}\nu$ (～を除いて)の挿入により、アリストテレスが木や石の何を壁の原因として認めなかったのかについて、結果的にテキストが不明瞭となってしまう。

そこで本稿は、「質料故に」の「質料」を形相と質料から成る合成体の質料部分とその運動を指示するものとして捉えたい。このように解すれば、アリストテレスは「質料故に」という仕方を除いて」という限定によって、壁が木や石などの合成体の質料部分とその運動により生成することを認め、他方で木や石などの個別の形相からそれが生成しないことを主張していると読める。木や石の形相とは別に、壁には壁の形相が別に存在し、木や石はそれのために生

成するからである¹⁵。以上の解釈が正しければ、アリストテレスは①－④で、壁は素材となる合成体の形相部分ではなく、質料部分とその運動の故に生じることを認めたことになる。そしてこれは、SNによる生成を主張していることにほかならない。以上の解釈が正しいことは、次の箇所でも確認できる。

「何かのために」が存在する限りの、他の全てのものどもにおいても「壁の生成と」同様である。つまり、これらは、必然的な自然本性を有しているものどもぬきには (ἀνευ τῶν ἀναγκαίαν ἔχόντων τὴν φύσιν) 生じないが、「質料として」以外のこれらの故に (διὰ ταῦτα ἀλλ’ ἢ ὡς ὕλην) 生じるのではなく、何かのために生じるのである (200a8-10)。

アリストテレスは、壁という人工物の生成に適用した説明を、それ以外の目的的な存在者にも拡張し、一般化している。例えば、「これら抜きに壁は生じなかった」(①)の「これら」は、より一般的に「必然的な自然本性を有しているものども抜きに」と言い換えられている。

「必然的な自然本性」はアリストテレスの著作の中で、上記を含めて二箇所しか確認できない。上記以外では『動物部分論』663b22-24に次のように見出される。

「必然的な自然本性」が存在するのであるから、「ロゴスに即した自然本

¹⁵ 木や石の軽重といった性質は形相によって規定されるので、「形相の故に」家屋が生成すると語ることができるのではないか、とする反論があるかもしれない。しかしこれは、重さが木や石にとっての本質を構成する場合である。アリストテレスは『動物発生論』で、目の色に目的性がないことを論じて、これに類する事例に関しては、始動因や質料因だけを探求するように述べている (778a29-b6)。目の色は、目の形相に起因するものではなく専ら質料自身を持つ本性に由来するからである。本稿はこれと同様に、木や石の軽重は、それぞれの形相に由来するものではなく、質料の持つ本性的な性質に由来すると考える。木や石は結局のところ四元素によって構成され、その構成の比率に応じて、木や石の重さも決定するからである。それ故に、木や石の重さは形相の故にではなく、それを構成する質料によって規定されるとするべきである。

性」がいかにして「必然から存在するものども」を何かのために転用したのかをわれわれは語ろう。

アリストテレスはここでも、「必然的な自然本性」と「ロゴスに即した自然本性」を比較し、前者を質料の持つ自然本性として解している。この例としてアリストテレスが挙げているのは、動物の角である。彼は、小動物に角を持つものがない理由として、角が土質部分の余剰物であることを確認し、こうした余剰物を蓄えることができるのは体の大きな動物であると推理する。体の大きな動物に含まれる土的な部分は、その本性に従い、体の上方部に必然的に流れ込み、その際に自然はこれを牙や角に転用すると彼は語る（663b24ff）。これはつまり、アリストテレスが「必然的な自然本性」という語句によって、土の上方への堆積という「本性上必然的な運動」を意味していることを示すだろう（cf.Cooper 1985, p. 166., n.14）。

それ故に、目下の文脈における「必然的な自然本性」というこの語句が意味しているのは、木が上に運動し、土台が下に運動するという素材の本性的、必然的な傾向性のことではなかろうか。実際アリストテレスは、『自然学』B1で自然を、運動と静止の原理（始原）を自らの内に有するものとして定義していた（192b20-23）。自然には基本的に質料と形相の二義があるが、この自然の定義に従えば、質料的な自然は自らのうちに運動の始原を持つことになる。これが質料の持つ必然的な自然本性の内実であろう。したがって、「必然的な自然本性を持つものども」とは、そうした必然的な運動を行う質料を有する合成体のことを指しているはずだ。しかし、厳密には、そうした運動をするのは合成体の形相部分ではなく質料部分であるので、アリストテレスはわざわざ「[質料として]を除いたそれらの故に」という断りをここでも入れているのだ。つまり、彼は質料を始動因的に理解し、壁の生成に際して、そのような素材の運動が不可欠であるとみなしている。そしてそのような理解の下に、彼は目的論的な生成を同時に主張するのだから、SNとHNの両立可能性を否定しているとする見解は全く不合理である。

恐らく、両立可能性を問題にするアリストテレスにとって、SNだけを主張

する論敵の主張を、自身の目的論的な見解と齟齬なく調和させることがB9の喫緊の課題だった。彼は一方では、自然学の領域において、必然性の帰属する「必然的なもの」(τὸ ἀναγκαῖον)が、質料とその運動であることを明白な事実として認め(200b30-32)¹⁶、他方でそれらが目的的にも生じるという主張をした。この一見相反する主張を両立させるためには、微妙な言い回しが必要となる。一見不自然にも思える「質料故にという仕方を除いて」という語句によって、彼が合成体の質料部分のみに言及しようとする努力は、まさにその苦心を表現したものだったと評価できよう¹⁷。

ただし、「質料故に」事物が生じると彼が主張していることは、彼がSNによって生成過程の十分条件を特徴づけられると考えていたかどうかを判断するにあたり、一つの有力な根拠となるであろうが、厳密には依然として彼が弱い両立可能性を主張している可能性は残る。この判断を下すためには、SNだけでなく、次節で彼がHNの役割をどのように考えていたのかを知る必要がある。

5 HNと共時的な視点

アリストテレスが、強い両立可能性を主張していることを示すためには、SNが目的因や目的生成過程に見出されるHNに質料的な次元で依存せず、独立していることを明らかにする必要がある。というのも、もしSNがHNに依存しているとすれば、それはSNだけで生成過程の十分条件を特徴づけられないことを意味するからである。そこで本節では、まずHNの出発点が定義にあることを確認し、推論的な性格を有していることを見る必要がある。その上で、SNとHNが全く次元を異にした必然性であることを示し、SNとHNのそれぞれは、同一の生成に対する、通時的な視点と共時的な視点の双方のうちに見出せ

¹⁶ その他、「必然的なもの」はロゴスの質料部分にも見出されることをアリストテレスは指摘するが(200b4-8)、いずれにせよ、それが質料部分に見出されることは確かである。

¹⁷ Sorabji 1980, p. 51, n. 24も、この個所を典拠に、目的論的な事象におけるSNの役割に言及している。

ることを明らかにする。この視点を確立した上で、SNの独立性が確保されることを説き、強い両立可能性解釈の正しさを示す。

ではまず、HNの内実に入り入ろう。アリストテレスはB9においてHNを次のように一般的に規定している。

もしゴール（テロス）が存在するだろうなら（*ἔσται*）、あるいは現に存在するならば、より先なるものもまた、存在するだろうし、現に存在する（200a20）。

HNにおいて、時間上より先なるもの（前件）は、上のようにゴール（後件）の存在によって必然づけられる。HNの必然性の根拠は前件ではなく、後件にあるからである。HNが事物の生成過程の善性を説明すると言われるのは、HNが持つまさにこのような性格に起因する。つまり、或るゴールが存在する場合には、一定の前件が存在することが必然であるとするなら、当該の前件はゴールを実現するために適切なものであり、また不可欠なものでなければならない。前件が持つこの適切性を示せることが、SNに見出せないHNの説明的役割である。というのも、SNは質料のいわば「衝動」的な運動に帰属するからだ。これに対し、HNはその必然性の根拠（ゴール）を構成要素たる質料のいわば外に持つことで、SNが示す生成過程の有する無駄のなさ秩序を保証し、衝動的運動の盲目性を排除することができるのである。

こうした例としてアリストテレスは鋸の生成をHNを用いて次のように説明する。

もしも、鋸とその機能「切断」があるだろうなら、それは鉄であること必然である（200a12f）。

アリストテレスは、こうしたHNの出発点、すなわちゴールの存在が定義と説明言表（ロゴス）によって決定されると明確に述べている（200a35）。例

えば、上の鋸の生成のゴール（切断）は、鋸の定義により規定され、それを基準にした推論の積み重ねにより後続のプロセスが決定される。それ故に、アリストテレスは次のように語る。

鋸の働きを、これこれの仕方での切断であると定義したとすれば、鋸がしかじかの歯を持たない場合には、その切断は存在しない。そして、これらの歯はもしそれらが鉄でないとすれば存在しない（200b5-7）。

上のようにして鋸という人工物のゴールは、鋸の働きを決定する定義によって規定される。鋸のある一定の切断の仕方を実現するためには、まず一定の形式を具えた（例えば尖った）鋸の歯が必要であり、さらにその歯を実現するためには、素材が一定の硬さを具えた鉄であることが必要であるというように。HNはこのようにゴールを基準にして、遡及的にそのゴールを実現する過程を明らかにしていく。重要な点はアリストテレスがこうした方法論を、人工物だけでなく、人間といった自然物にも拡張して適用していることだ。

もし人間がこれこれ〔甲〕であるならば、かくかく〔乙〕であらねばならず、かくかく〔乙〕であるならば、これこれ〔丙〕でなければならない（200b3f）。

HNはこのようにして、自然物においても、定義を出発点（アルケー）に据えて、生成過程を推論的に導く。実際、目的因である「そのためのそれ（トフーヘネカ）」が質料ではなく、ロゴスの内に存在すると語られるのもこの故にであろう（200a14）。

以上の通り、HNはSNとはかなり性格を異にした必然性であると言える。一

¹⁸ 三浦 2008,48頁は、Charltonに同意して*aitia*を説明概念として捉え（45-6頁）、HNが自然現象そのものの内になく、自然の原理的把握の段階で生じる必然性だと説く。

方SNは質料とその運動に関係しているのに対して、他方HNは定義やロゴスといった何か推論的な領域に関わっているからだ(200a13-15)¹⁸。だとすれば、HNはこの推論的な性格の故に、生成過程の十分条件を担うことはなおさらできないはずだ。というのも、生成過程の十分条件を担うのは、生成過程の只中で運動している何らかの質料に関係した必然性でなければならないからである。以下では、このことをより詳しく説明するために、SNとHNの差異を、時間という観点から考察したい。

1節で確認したように、必然性の両立可能性を問題にするアリストテレスは、SNとHNが示す生成過程の全体($M_1 \cdots M_n$)が一致することを主張している。だが同時に、SNとHNは今見たようになかなりその性格を異にしていることも事実である。つまり、SNは一方で時間軸に沿って前件がゴールを漸次的にボトムアップ方式で必然化するに対して($M_1, M_2 \cdots M_{n-1}, M_n (=G)$)、HNでは逆に、時間上最後に位置するゴールが、遡及的にトップダウン方式で前件を必然化する($F (=G) \Rightarrow M_n, M_{n-1} \cdots M_2, M_1$)。こうしたことが可能となるのはSNが時間的であるのに対し、HNが無時間的だからであろう¹⁹。SNとHNがこの相反した性格を有するのは、双方が持つ視点の違いに落ち着く。つまり、前者は通時的な視点から生成過程を捉え、後者は共時的な視点から生成過程を捉えているということだ。この二つの異なる視点から同一の事物の生成を論じることで、アリストテレスは二つの必然性が両立すると考えたのではないだろうか。もっとも、これは同一事象についての二重の説明ではない。なぜなら、見てきたように、SNは質料とその運動に帰属して、生成の十分条件を特徴づけるが、HNは生成過程の善性を説明することで、それぞれに固有の役割を果たしているからである。

¹⁹ 200a15-19において、アリストテレスは自然物の生成過程に見出されるSNと、数学における、前提(直線はこれこれである)から結論(三角形は必然的に二直角の内角を持つ)が導かれる必然性を「ある種平行」(200a16)であると語る。つまり、双方ともにスタートからゴールに向かう方向性を有しているという意味で平行であるが、数学は生成の次元と比べ無時間的であるがゆえに留保を加えたものと思われる。

これは逆に言えば、SNが生成過程の善性を説明し、HNが生成過程の十分条件を特徴づけることはないということである。なぜなら生成過程の善性を説明するためには、生成過程全体を見渡すメタな視点が必要不可欠となるし、生成過程を担うためには、時間上より先なるものから、より後なるものへと移行する通時的な運動と、その運動を遂行する合成体の質料部分が必要だからだ。それ故に、こうした事物の生成が実現するためには、時間を介した、通時的な視点と無時間的な共時的な視点の二つが必要となる。

以上の分析が正しければ、アリストテレスは弱い両立可能性ではなく、強い両立可能性を主張している。SNとHNは、通時的そして共時的視点の双方からそれぞれに固有な役割を担うことで、生成という事象を相補的に説明しうる。それ故に、双方の必然性の一方が不要となるわけではなく、双方の必然性が必要となるのである。アリストテレスによって端的必然性と条件的必然性の両立可能性は以上のようにして語られる。

結 語

本稿のこれまでの解釈は、「必然に基づき、すなわち第一に動かすもの（始動因）と何らかの質料に基づき生じるものに関しては、さしあたり、その説明を示すよう試みなければならない」（『動物発生論』731b21f）というアリストテレスの方法論の下に保証されることとなるだろう。質料的には何を語ることができ、何を語ることができないのか、自然事象を説明する際にアリストテレスはその境界線を見極めるようにわれわれを論している。目的的事象を説明するに当たり、われわれは（A）解釈のように安易に目的因の力に頼るべきではなく、まずは始動因と質料因によって十全な説明が可能かどうかを検討する必要があるからだ。目的的自然事象を質料的に記述しようとするわれわれの試みは、彼のこうした方法論に適ったものと言える²⁰。

参考文献表

- Balme, D. M., 1987. "Teleology and Necessity", in A. Gotthelf and J. G. Lennox (eds.), *Philosophical Issues in Aristotle Biology*, Cambridge: Cambridge University Press., 1987., 275-286.
- 1992. *Arsitotle's De Partibus Animalium I and De Generatione Animalium I (with passages from II. 3)*. rev. edn. with a report on recent work and additioal bibliography by A. Gotthelf. Clarendon Aristotle Series. Oxford (orig. 1972) .
- Bradie, M., Miller., 1984. F. D., "Teleology and Natural Necessity in Aristotle," *History of Philosophy Quarterly*, 1: 133-146.
- Byrne, C., 2002. "Aristotle on Physical Necessity and the Limits of Teleological Explanation," *Apeiron*, 35: 20-46.
- Charles, D., 1988. "Aristotle on Hypothetical Necessity and Irreducibility," *Pacific Philosophical Quarterly*, 69: 1-53.
- 1991. "Teleological Causation in the *Physics*," in L.Judson (ed.) , *Aristotle's Physics*:

²⁰ 本稿では十分に論じることができなかったが、目的因やHNが単なる自然事象の善性を説明するための反省概念なのではないかと考える立場については、Wieland1975, Nussbaum1978を見よ。目的因が形相因と同一視されることを主張するテキスト (e. g. 『自然学』198a24f, 『動物発生論』715a3-9) は、そうした発想が安易なものであることを教えてくれることだろう。実際に、『形而上学』Z17は、目的因を含む四原因(「何故にか」に対する応答)をロギコスに言えば本質(「何であるか」に対する応答)であると言い(1041a26-30)、目的因が形相因と同様に事物の一性のある局面において確保する存在論的な役割を担うことを物語っている (cf.Charles2010; Chiba2012)。したがって、目的因は反省概念ではなく、実際に自然事象のうちに内在し、質料因を支配するはずだ。では、SNだけで生成過程の十分条件を特徴づけることができると主張する時、目的因は何を支配する余地が残されていると言えるだろうか。この問いに対し本稿は、目的因が生成過程の適切な最初期の質料M₁を提供すると考える。SNは与えられたM₁自身が持つ自然本性的な運動によって、生成過程の十分条件を特徴づけるが、それ自身衝動的な運動であるために、ゴールを実現するために必要な初期条件そのものを偶然的には可能でも、恒常的に提供することはできないはずだ。では目的因はいかに生成過程を支配するだろうか。この問題を議論するためには、アリストテレスの様相存在論を取り扱う必要がある。実際、アリストテレスは人間の生成を「完成態にある人間が、力能態においてある人間から人間を作る」(『自然学』202a11f)と述べている。だが本稿では紙幅の都合上この問題を取り扱うことはできない。少なくとも、二つの必然性の両立可能性が確認できただけでひとまず満足することとしたい。

- A Collection of Essays*, Oxford, 101-128.
- 2010. "Definition and Explanetion in the PosteriorAnalytics and Metaphysics" in D. Charles (ed.) , *Definition in Greek Philosophy*, Oxford., 2010. 286-328.
- Charlton, W., 1992. Aristotle' s *Physics Book I and II, with a report on recent work*. Clarendon Aristotle Series.Oxford.
- Cooper, J. M., 1987. "Hypothetical Necessity and Natural Teleology" in A.Gottself and J. G. Lennox (eds.) , *Philosophical Issues in Aristotle Biology*, Cambridge: Cambridge University Press, 243–274.
- Frede, D., 1985. "The Limits of Determinism" in A. Gotthelf (ed.) , *Aristotle on Nature and Living Things*, Pittsburgh: Mathesis Publications, 207-225.
- Gotthelf, A., 1976/1977. "Aristotle Conception of Final Causality" *Review of Metaphysics*, 30: 226–254; reprinted with additional notes and a Postscript in A. Gotthelf ,*Teleology,First Principles and Scientific Method in Aristotle' s Biology*, Oxford University Press., 2012.3-44.
- 1997. "Understanding Aristotle' s Teleology," reprinted with additional notes and a Postscript in A. Gotthelf, 2012, 67-89.
- 2012. *Teleology, First Principles, and Scientific Method in Aristotle' s Biology*. Oxford Aristotle Studies. Oxford.
- Kahn, C. H., 1985. "The place of the Prime Mover in Aristotle' s Teleology" , in Gotthelf 1985, 183-205.
- Chiba, K., 2012. "Aristotle on Heuristic Inquiry and Demonstration of *What it is*" in C.Shields (ed.) , *The Oxford Handbook of ARISTOTLE*. Oxford. 171-201.
- Lang, H. J. 2007. *The Order of Nature in Aristotle' s Physics: Place and the Elements*, Cambridge University Press.
- Lennox, J. G. 2001. Aristotle' s *Philosophy of Biology:Studies in the Origins of Life Science*. Cambridge.
- Nussbaum, M., 1978. "Aristotle on Teleological Explanation," in M. Nussbaum, *Aristotle' s De motu animalium*, Princeton: Princeton University Press, 59–99.

- Philoponus, I., 1854. *In Aristotelis Physicorum Commentaria*, (ed.) H. Vittelli. Berl., Leipzigh
- Sedley, D., 1991. "Is Aristotle's Teleology Anthropocentric?" *Phronesis*36, 179-196.
- Simplicius., 1885. *In Aristotelis Physicorum Commentaria IX*, (ed.) H. Diels
- Sorabji, R., 1980. *Necessity, Cause and Blame*, Ithaca: Cornell University Press.
- Thomas Aquinas., 1963. Commentary on Aristotle's Physics, tr. R. J. Blackwell, R. J. Spath and E. Thirlkel. New Haven.
- Waterlow, S., 1982 *Nature, Change, and Agency in Aristotle's Physics*. Oxford.
- Wieland, W., 1975. "The Problem of Teleology," in J. Barnes, M. Schofield, R. Sorabji (eds.), *Articles on Aristotle*, London: Duckworth., 141-160.
- Ross, W.D., 1936. *Aristotle's Physics: A Revised Text and Commentary*. Oxford.
- アリストテレス、坂下浩司翻訳2005、『動物部分論・動物運動論・動物進行論』京都大学学術出版会
- 千葉恵2002、『アリストテレスと形而上学の可能性—弁証術と自然哲学の相補的展開』勁草書房
- 樋口博也1994,「自然と必然—アリストテレス『自然学』における一問題—」『哲学誌』36号、25-44頁
- 三浦洋2008,「アリストテレス『自然学』第II巻第9章における「必然性」の再検討」西
洋古典学研究 56, 38-50頁

付記：千葉先生との思い出

千葉先生との出会いは今でも鮮明に覚えている。それは14年前の2008年4月に開講されていた1年生向けの全学教育科目だった。「人間の学としての人文学」という授業で、高校生の頃から漠然と哲学に憧れを抱いていた私は、そのシラバスに一目惚れしていた。シラバスのキーワードには、哲学の重厚な概念群がずらりと並び（正義、善、知識、真理、幸福、愛、信念、価値、実存、自由意志、形相、質料、完成態、目的論的自然観と機械論的自然観）、哲学のいろはもわからない私はただただ圧倒されたものである。それは高校を卒業したばかりの当時の私には、どれも刺激的で魅惑的で全く新しいものに映った。私はシラバスを見るなりすぐさま履修を決めた。

授業は千葉先生の歌から始まった。「元気でいるか、町には慣れたか、友達できたか。寂しくないか、お金はあるか、今度いつ帰る」。先生の思いがけない歌声に学生は面食らい、ざわめきがこった。その歌はさだまさしの「案山子」という曲だった。「案山子」は徳島から見ず知らずの北海道に来て、初めて一人暮らしを始めた自分の不安な心境をずばり言い当てていた。思えばこの「案山子」の歌は、教育者として温かみのある先生のお人柄を良く表していたように思う。

千葉先生は授業の中で、時にプラトンの『パイドロス』から美の定義を引いたり、時にパスカルの『パンセ』から人間存在の栄光と愚鈍さについて記した一節を読み上げたり、また或る時は宮沢賢治の「生徒諸君に寄せる」という詩を高らかに暗唱し、人間と学問の持つ無限の可能性を歌ってくれた。私はまるで、田舎から上京し、崇高で高邁な議論に耽溺する教養小説の主人公にでもなったかのような興奮に包まれていた。先生の引用するパッセージの一つ一つがどれもこの世界の不可思議さと深淵さを思い知らせ、若者の知的好奇心を掻き立たせていた。また、或る時はクラーク先生のように若者に志を持つことの重要性を説き、或る時はマザー・テレサのように苦しみを分かち合うことの人としての豊かさを教えてくれた。大滝セミナーハウスでの夏の哲学合宿では、先生

の講義だけでなく、レクリエーションとして体育館でバドミントンやサッカーを行ったり、将棋や川遊びやスイカ割りなどもしたものだ。また夜は学生同士の哲学談義も繰り広げられた。思えば大学教育においてこうした人格教育とでも言うべき教育を企ててくれたのは千葉先生だけだったかもしれない。研究だけでなく、学生自身の内面性の成長にまで気を配られていて、学生たちの「魂への配慮」（ソクラテス）を重視されておられたのだ。

千葉先生の専門は、いうまでもなくアリストテレスとパウロだが、先生の論文全体には両立可能性と共約可能性がいつも通奏低音として響いていた。両立可能性では自由と必然、徳と恩寵といった一見対立しあうような諸命題を哲学的調停に導き、共約可能性では一見分かち合うことが困難に思える形而上学的な主張や、「霊」といった宗教学的な存在について、哲学の方法論的な制約の自覚の中で、理解可能なものとするべく言葉を紡ぎ、彼岸と此岸の架橋を試みられていた。その多くは数年前に刊行された『信の哲学』において確認することができる。『信の哲学』は私が入学した2008年には既に取り組んでおられた先生のライフワークであるが、同著において先生はアリストテレスの解釈史をひっくり返すようなエネルゲイア・エンテレケイアの新訳と、ローマ書3章の新訳を主に展開している。私は幸運にもこの思考形成の現場を先生の研究室や授業の中で垣間見ることができたが、先生のアイデアの発見と吟味に腐心する様子をほとんど毎日といってよいほど私は見ていた。同じ個所の翻訳は日に日に変わるし、その度に全く違った角度でテキストが読めるようになるという古典読みの面白さを身を以て教えてくれた。先生は常日頃、哲学とはわれわれが捕らわれている足枷（難問）を美しく問い、事柄そのものに即して、思考を前進させる営みであると説いておられたが、『信の哲学』の各章はほとんど私の入学当時にはなかったアイデアと発見に満ちており、ここまで思考は練磨され、刷新されるものかと私はただ驚嘆していた。カトリックとプロテスタントの和解を大きな課題とした本書は聖書全体を貫く「信（ピスティス）」についての理解を巡って、これまでになかった発見をされている。その主張のキリスト教全体への影響力を正しく見定める立場にはないが、少なくとも私はこの書を通

じて、自らが律法主義者として他者に対して認知的な、また人格的な正義を暗に強要する悪癖を持ち合わせていることを自覚した。皮肉なことに、他人の思考や議論について、不足、欠陥を指摘する哲学的議論の仕方や人格的バランス、有徳性や正義の重要性を絶対視する倫理学を通じて、私はいつしか議論の文脈を日常に拡張して、社会や他人に対して斜に構え、攻撃的な態度をとってしまっていた。他人に対しても、自ら自身に対しても、常に満ち足りず、自らを取り巻く世界の不十全性に落胆し、怒りを覚え、まるで法廷の裁判官のように自らの理性や感性を拠る所に誰かを裁くことに忙しくなっていたように思う。パウロが言うところの業の律法に私はすっかり従って生きていて、聖書で言えば永久にこの律法下において裁き、裁かれ続ける存在であった。『信の哲学』はこうした業の律法に苛まれる次元の自己を指摘し、別の選択肢「信の律法」があることを教えてくれた。哲学のことを悪く言うつもりはないが、哲学をやっていただけでは決して辿り着けない議論であった。それは哲学をする当の人間を括弧に入れず、神の前という次元から人間の行為を明るみにし、人間中心的な物差しの差替えを迫る議論である。この本を読んで以来、私の行為指針は、誰かに自らの正義やこだわりを強要したり強制したりせずそれらから自由であり、また寛容であること、そして他者に対して信実であろうとすることとなった。『信の哲学』はこうして私自身の歪みを自覚させ、考えと態度を実際に改めさせてくれた。私の人生にとってこれは本当に大きな変化であった。

最後に、千葉先生の退官にあたって、退官記念パーティを催せなかったことをお詫びしたい。千葉先生からは、言葉に言い表せないほどの哲学的、思想的、宗教的な影響を受けたにも関わらず、ついぞ十分に感謝を言い表すことができなかった。先生ほど愛について信について、その重要性を語る大人に会えたことはない。先生との出会いは文字通り賜物であり、幸運であった。この場を借りて先生へのこれまでの感謝を申し上げ、本稿を締めくくることとしたい。